様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１１８８

研究課題名（和文）宗教現象学の形成と論争に関するトランスナショナル・ヒストリー

研究課題名（英文）Transnational history of the phenomenology of religion

研究代表者
藤原　聖子（Fujiwara, Satoko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：１０３３８５９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,500,000円

研究成果の概要（和文）：宗教現象学は20世紀中葉に「宗教学ならではの宗教研究」として確立されたが、その後、神学的かつ実証性に乏しいという理由で「非科学」的と批判され、衰退した。同じ基準はヨーロッパの宗教学者によりアジアにも適用され、日本の宗教学も「非科学」的・後進的と位置づけられてきた。本研究は、「科学」の語をそのようにレッテルとして用いるのではなく、歴史化した。すなわち、個々の宗教現象学者がトランスナショナルな移動・交流を通して、自身の学問的営為を「科学化」する試みを再構成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
欧米で形成されたこれまでの宗教学史観は、宗教現象学は宗教学が神学から科学へと進化する過程での過渡的なものにすぎなかったという単線的進化図式に基づいていた。それに対して、「科学」を本質主義的にとらえるのではなく、歴史上の「科学化」のポリティックスの分析へと視点を切り替えることで複線的な宗教学史記述を可能にした。その視点を現在の国際宗教学会の論争に持ち込み、多様性と包摂を実現するための議論に貢献した。

研究成果の概要（英文）：The phenomenology of religion was established in the mid-20th century as a unique approach to the study of religion within the field of religious studies. However, it later declined after being criticized as “unscientific” due to its theological orientation and lack of empirical basis. The same criteria were applied to Asian scholars by European scholars, and Japanese religious studies were also categorized as “unscientific” and backward. Against this backdrop, this collaborative research project has proposed to historicize the term “science,” instead of using it as an essentialistic label. That is, it has reconstructed the attempts by individual phenomenologists of religion to “scientize” their scholarly endeavors through transnational movement and exchanges.

研究分野：宗教学史、理論宗教学、比較宗教学

キーワード：宗教現象学　国際宗教学宗教史学会　IAHR　科学史　学問史　知識社会学　トランスナショナル・ヒストリー　宗教学と神学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 28～31 年度に実施した「宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究」(基盤研究 B 課題番号 16H03354)に、新しい資料と視点を加え発展させたものである。宗教現象学は、宗教学のディシプリン・アイデンティティとして 20 世紀中葉に確立された分野である。1990 年代以降は時代遅れとされ、国内外を問わず学界から後退した。しかし、宗教現象学をめぐって戦わされた、宗教学の学術性とは何かという議論の枠組みは今日も引き継がれ、特に国際学会の場では、対立の構図がこのところ顕在化している。そこでは、20 世紀の論争から一部を切り取り、恣意的な解釈を施し、自説の補強に用いるという問題が起きている（Wiebe 2021, Ambasciano 2019, Robertson 2021 など）。

２．研究の目的

そのような背景に対して本研究は、20 世紀の宗教現象学論争を、学説史のみならず制度としての宗教学や国際宗教学宗教史学会（International Association for the History of Religions, IAHR）を取り巻く社会的状況に照らして、国境を越えた研究者の移動と交流に注目しながら絵丁寧に再構築し、その研究成果を宗教学のこれからのあり方を考える国際的議論の場に反映させることを目的とした。

研究の内容は次の３本の柱から構成された。

①IAHR や他の国際学術団体における論争を、国境を越えて移動する複数の「人（個人）」の足跡・交流の軌跡に即して再構築する。

②彼（女）らの宗教現象学関連のテキストを、未邦訳・未公開資料（前期の本研究で収集したものと今期新たに収集するもの）を中心に読み込む。

③宗教学以外の学術領域、また欧米諸国以外の地域で類似する議論が同時期に起こっているかどうかを調べ、①と②の研究を複眼的に行えるよう試みる。

３．研究の方法

宗教現象学者と呼ばれてきた宗教学者・関連する研究者について、次のように担当を決め、１次・２次資料を分析した。

分析の結果を年数回の研究会において報告し、意見交換を行った。

藤原聖子……R. J. Bleeker（オランダ。IAHR 事務局長 1950-70）Geo Widengren（スウェーデン。IAHR 会長 1960-70）、IAHR 史通史。Bleeker に関しては研究協力者の久保田浩氏の協力を得た。

木村敏明……Chantepie de la Saussaye（オランダ）G. van der Leeuw（オランダ。IAHR 初代会長 1950）、IAHR 創立時の経緯。

宮嶋俊一……Friedrich Heiler（ドイツ。IAHR マールブルク大会主催者）、IAHR 東京大会（1958 年）。同マールブルク大会（1960 年）の経緯。

江川純一……Raffaele Pettazzoni（イタリア。IAHR 会長 1950-1959）、IAHR ローマ大会（1955 年）、同東京大会（1958 年）の経緯。

奥山史亮……Mircea Eliade（ルーマニア→米国へ移住。IAHR 副会長 1970-75）、国際組織／日本への影響。Raffaele Pettazzoni との関係。

藁科智恵……Rudolf Otto（ドイツ）、国際組織・ドイツ／日本との関係。

志田雅宏……Zwi Werblowsky（ドイツ→イスラエルへ移住。IAHR 事務局長 1975-85）が IAHR と日本宗教学会に関わった経緯。

開始年度の 2020 年春から COVID-19 パンデミックが発生したため、2022 年度までは予定していた海外調査（文献蒐集）が著しく妨げられた。その間の工夫として、オンラインで過去の IAHR 会長にインタヴューを行った。また、ドイツに関しては現地の研究者に委託し、IAHR に 1950 年代から関わり、後にその会長を務めた Annemarie Schimmel（1922～2003）について、マールブルク大学等に保存されていた未整理資料を整理した。その成果は 2021 年 4 月にマールブルク大学宗教博物館の特別展示として公開された。

４．研究成果

(1) 前期の研究成果のフォローアップ

前期の研究成果である、日本を含む 10 カ国の宗教学者に対して行った、各国の宗教現象学史についてのインタヴュー調査の成果を IAHR 叢書シリーズの 1 冊として 2021 年 3 月に刊行した（*Global Phenomenologies of Religion: An Oral History in Interviews*）。これにより、まずナショナルなアカデミアの枠内でどのような展開があったかについて理解を共有した。主な発見として、宗教現象学の盛衰には世代間対立の要因が大きいこと（オランダ、ドイツ）、宗教現象学を哲学から切り離し分類学として受容したとされる北欧諸国でも、宗教学者個人の宗教観には哲学的人間学ともいうべき要素が含まれていること（スウェーデン、フィンランド）、肯定するにせよ否定するにせよ宗教現象学を鏡として自国の宗教学を自己規定してきたこと（イギリス、イタリア、

アメリカ、カナダ、日本)、非西欧諸国の場合はアメリカとヨーロッパのどちらの影響が強いかにより宗教現象学観が変わること（韓国、日本）が挙げられる。さらに、「宗教現象学」概念が何を指すのかについての、人によって多様な理解が、〈記述－本質論〉〈ロバスト－選択〉〈価値－無価値〉の 3 つのスケールによりそれぞれ位置づけられることを示した。本書は *Religious Studies Review*(47/2, 2021)やアメリカ宗教学会の Reading Religion(March 2023)において肯定的に書評された他、オランダ宗教学会内に論争を引き起こすといった国際的インパクトがあった。

(2) 宗教現象学者の国際的宗教研究ネットワークの形成とその社会・宗教史的背景の解明

(1)の成果に対して、宗教学者たちのトランスナショナルな動線を加えることで、自国の宗教学史を語る宗教学者にありがちな（実際に *Global Phenomenologies of Religion* の元となった調査において各国のインタヴュアーに度々見られた)、「私の国の宗教学／宗教現象学は科学的である」という語りをいったん保留し、代わりに歴史の流れに沿って「科学化」のプロセスないしポリティクスを記述・分析した。その主な成果を宗教現象学者ごとにまとめると以下になる。

Van der Leeuw については、これまで C. P. Tiele、de la Saussaye に始まるオランダ宗教学史というナショナルな文脈の中で、宗教現象学の確立者として語られてきたのに対して、オランダのインドネシア植民地経営、宣教の現場との関係から新たな光を当てた。宗教現象学がオランダで発展した原因として、被植民者の宗教的世界観の理解に対する社会的ニーズがあり、そのために進化論図式が不要になり、宗教現象学の台頭が促されたことを明らかにした。これはアニミズム説などの進化論に抗して、特定地域の宗教実践をその地域の文脈に即して説明しようとする「科学化」の要請から、逆説的にも体系的宗教現象学が生まれたことを示唆する。

Pettazzoni については、1955 年 IAHR 世界大会をローマに招致するに際し、ヴァチカンとの攻防を経験することが、彼の世俗的な学としての宗教史学の提唱に影響を与えたこと、その過程で Van der Leeuw の宗教現象学を神学と宗教学の妥協と位置づけたことを明らかにした。一般に近代的宗教研究は、カトリック圏よりもプロテスタント圏で発展したと言われるが、なぜカトリック圏のイタリアでオランダよりも世俗性をアイデンティティとする宗教学が求められたのかについて社会史から掘り下げた。また、そのように Pettazzoni が実証性を重視しつつも類型論的志向をもったことについて、ヴィーコに遡るイタリア人文学の伝統と日本の宗教学者との交流の両面から迫った。これは「科学化」志向とナショナルな宗教的背景の間のアンビバレントな関係を示している。

Eliade については、戦前のナショナリスティックな言論を、戦後の国際秩序に対応するために再構築していった過程を整理しながら、宗教現象学の形成、および IAHR 創設との関係性を検討した。現在の欧米の宗教学者による Eliade 評価において、普遍主義・本質主義・神学性批判とルーマニア時代の軍団運動批判が別々のものとしてなされているのに対して、Eliade の足跡と Julius Evola との関係を示す資料をもとに、彼の宗教現象学が、ナショナリズムの記憶を抑圧し、トランスナショナルな比較を行う学へと昇華させることによって生まれた過程を明らかにした。さらに、その過程で IAHR の創設に彼が（これまでの IAHR 史で認知されていた以上に）積極的に関わっていたことが Pettazzoni との往復書簡から示された。これは、露骨なイデオロギー色を除去するという意味で「科学化」を目ざす試みが、宗教現象学を引き寄せた例である。

Heiler については、ドイツの後続世代による評価は、彼の研究は反証不可能な神学的命題に基づいており、科学的ではないという批判であった。これに対して、1960 年 IAHR 世界大会招致の前後で、彼がアジア諸国を訪問し、諸宗教の対話・協力の運動に関わった過程を再構成した。そして現在の基準で評価するならば、むしろ彼が一貫してカトリックの認識原理で現地の宗教を説明づけようとした面が批判されるべきだが、それはドイツという特定の立ち位置からの、J・Habermas 的意味での翻訳作業としてもとらえることができる。彼の例は、実践を重視した宗教学者は「非科学的」であったというよりも、宗教の複数性を説明づけ、世俗性を必要条件とせずに公共の空間を築くことを試みていたことを示す。

Otto については、その著書『聖なるもの』は、彼の同時代人によってもその後の受容においてもしばしば「非合理主義」の書と見なされた。しかし Otto 本人がこの書の中で非合理主義とは距離をとっていることを看過すべきではなく、それは当時の神学論争、社会史的文脈から理解することができる。そして、この書が合理・非合理の二面性をもつのは、彼が宗教体験を感情と呼び、身体性を重視しつつも、同時に客体（神）に至る認識作用としてもとらえていたことが一因だが、これら 2 つの面は 21 世紀の宗教学で新たな展開を見せている。すなわち、感情ないし体験の主観性の面はミクロな「生きられた宗教 lived religion」研究として、他方、認識作用としてのヌミノーゼ体験の面はマクロな認知科学的宗教研究として。神学者を自認する Otto は現在の「科学的」宗教学とまったく関係ないのかといえば、そのモチーフのいくつかは、このように、『聖なるもの』に内包されていたのである。

Bleeker については、その「science」の語の使用が、自然科学という意味ではなく哲学を含むものであったこと、よって彼の事務局長時代の IAHR ではその語を宗教学の自己規定に使うことは全く自明でなかったことを明らかにした。つまり、IAHR という場で science の概念から哲学が排除されていく過程は、公用言語の英語中心化と重なっていたのである。また、日本の宗教学を「直観的」であり、分析ではないと評した彼が、自らの研究では本質直観という方法を使い、さらに宗教学の社会的妥当性を説き、それによって当時、Werblowsky らから非科学的であるという批判を浴びたのはなぜなのかを、その青年期の政治的・宗教的活動との連続性も考慮するこ

とで再考した。彼の「科学化」「脱科学化」の両面性は、脅威としてのアメリカ、包摂すべきアジアと同時に対峙する中で形成されていった。

Werblowsky については、彼は 1960 年マールブルク大会で、Heiler のみならず Bleeker に対しても非科学的・神学的という批判を行ったことにより IAHR 史に刻まれてきたが、いくつかの新事実が明らかになった。すなわち、1980 年代にスウェーデンの宗教学者の反セム主義的言動を批判する政治的キャンペーンを率い、当時の IAHR の会長・事務局長にこの運動を支持する声明を発出するよう働きかけたこと。また、Werblowsky は IAHR 役員時代に日本を何度も訪問するが、日本の宗教学者に「科学化」を促すというよりも、仏教者との交流に多くの時間を割いていたこと。これらの側面は、彼がイスラエルではもっぱら宗教間対話の活動家として位置づけられていることとも符合する。つまり、本共同研究で対象とした宗教学者の中ではもっとも科学的であると見なされている Werblowsky でさえ、社会的・政治的アジェンダのもとに選択的に「科学化」を行っていたことが見えてきた。

以上の研究成果は、宗教現象学を「科学ではない」「科学である」とレッテル貼りし、切り捨てたり再評価したりするのではなく、多様で絶え間ない、学術的コミュニティからの承認を求める「科学化」のプロセスとしてとらえるアプローチの生産性を示している。「科学化」は研究者の地理的移動により、ナショナルな「科学性」の理解が揺さぶられるときに、あるいはアカデミア―政治の領域的移動により、顕著に起こること、宗教現象学や類型論はその手段として要請されたことが明らかになった。これにより、従来の単線的な宗教学史観での宗教現象学の位置づけ―神学から科学へと宗教学が進化する過程での過渡期の学―に抗して、「科学」自体を文脈化し、複線的に宗教学の歴史をとらえることが可能になった。これらの成果は論文集『宗教現象学者たちの軌跡――国際的宗教研究ネットワークの形成とその社会的・宗教史的背景』として 2024 年上半期に刊行予定である（オンライン・オープンアクセス）。

(3) これからの宗教学のありかたについての国際的議論への貢献

その意味での「科学化」は現在も IAHR という国際学会のアリーナで進行中である。本共同研究は、その論争を記述し、従来の論争と比較するという学史的作業を進めるとともに、その論争に自ら参与・貢献することを目ざした。すなわち、ヨーロッパの宗教学者の「私たちは科学的である」という自己確認の再生産に疑問を投げかけ、国際学会をより実質的に世界に開くために日本の宗教学者は何を行うことができるかという課題である。これについては、本共同研究の申請時は IAHR の役員会（Executive Committee）を招いてのシンポジウムを日本で開催し、役員会と対話を行うことを計画していた。

この計画はパンデミックの影響を受けたが、開催時期を遅らせたことにより、想定した会議よりも拡大した形で 2023 年度に東京で実施することができた。すなわち、IAHR の役員だけでなく、IAHR 全加盟学会の代表者を招いての 2 日間の特別カンファレンス（Special Conference）に拡張し、その規模と重要性を鑑み、主催者を日本宗教学会とし、本研究グループは組織委員として企画・運営に中心的に関わった。カンファレンスのテーマは、本プロジェクトの当初案「「国際宗教学会の伝統」を語ってきた者誰か――インクルーシブな伝統の再構築のために」のコンセプトをベースに、2020 年からのコロナ禍の体験、2022 年のロシアによるウクライナ侵攻に対する IAHR の政治的声明発出をめぐる議論等を加え、「IAHR は政治的にも護教的（confessional）にもなることなく、社会に関わり社会的レリバンスをもつことはできるか？――2023 年の「（科）学」の位置」に定めた。

宗教学の文脈での「（科）学 science」の概念の理解を深め、かつ共有するために、基調講演者に国際科学史・科学哲学連合会長の Nancy Cartwright 氏を招聘し、そのレスポンダントとして哲学的観点からの理論宗教学に関する業績の多い、Jeppe Sinding Jensen 氏と Kevin Schilbrack 氏も招聘することになった。基調講演のセッションのあとのラウンドテーブルには、6 人の宗教学者を南アジア・東南アジア宗教学会、メキシコ宗教学会、アフリカ宗教学会、イギリス宗教学会、アメリカ宗教学会、日本宗教学会から招聘した。さらに日本宗教学会の若手メンバーと IAHR の役員によるパネルを企画した。終了後に編集を開始したプロシーディングスは 2024 年度前半にオンライン・オープンアクセスの形態で刊行予定である。

IAHR 特別カンファレンスの意義について補足すれば、IAHR は 5 年に 1 度の世界大会の他、重要な節目に、役員会・加盟学会の主要メンバーから構成される研究集会を開いてきた。代表的なものは 1973 年にフィンランド・トゥルクで開催された、宗教現象学を主題とした会議、1988 年ドイツ・マールブルクで開催された、IAHR のグローバル化を主題とした会議である。これらの研究集会は IAHR の歴史をふり返り、今後の方針を検討する上で重要な役割を果たしてきた。東京でのカンファレンスはこの歴史に続く重要な研究集会として IAHR 役員会によって位置づけられている。

カンファレンス当日は、IAHR の多様性の実態と、その実態を前にしたときのヨーロッパ側の宗教学者の反応を浮き彫りにする展開となった。このため、IAHR の役員であり、出版を担当する Katja Triplett 氏から、プロシーディングスの刊行で終わらせず、内容を発展させた英文論文集を、IAHR 叢書から出版する提案があった。この論文集は、本共同研究の代表者と、カンファレンスのラウンドテーブル登壇者である Denzil Chetty 氏、Triplett 氏の共同編集で作成することになった。

また、このカンファレンスについては、日本宗教学会の学会誌で、開催の目的・経緯・背景を

説明したことにより、新聞（『中外日報』）で取り上げられるなど、学会を超えてのインパクトがあった。さらに、開催準備の一環として、より詳細な背景を、宗教現象学者と IAHR の関係史の観点からまとめた論文をオープンアクセス方式により刊行し、広く課題の共有に努めた。

(4) マクロ理論の再構築の可能性に向けての助走

宗教現象学を中心とする学史研究を現在の宗教学にフィードバックするために、メンバーを報告者とするパネル発表「宗教現象学と認知進化科学の対話――理解の学と説明の学の架橋」を 2023 年度日本宗教学会年次大会にて行い、ディスカッサントとして心理学者の石井辰典氏を招いた。宗教現象学と、マクロ理論ではあるが異質な枠組みをもつ認知進化科学を組み合わせるという大胆な試みにより、本プロジェクトが積み重ねてきた学史的研究を、これからの宗教学理論の構築に反映させるための問題提起を行った。このキックオフ・パネルにも多数の参加があり、宗教学会の会員の関心の高さが窺われた。

(5) その他

国際発信の取り組みとしては、報告書に記載した関連業績のほか、日本宗教学会発行の『日本宗教学会五十年史』の英訳（監訳）・ウェブ公開がある。これは、本プロジェクトによる IAHR 史研究を踏まえながら現在に至る IAHR 内外の論争を分析すると、日本の宗教学の特徴がいかに歪曲されて海外に伝えられてきたか、その問題を改めて認識するに至ったことが契機となったものである。英訳は IAHR のウェブサイトにもリンクを張り、海外の研究者に認知されやすい形で提供している。

今期の本共同研究と時期を同じくして、国際的にも宗教現象学者や IAHR 役員についての論文集等が出版され、研究の連携可能性が広がっている。スウェーデンの Göran Larsson の編集による、Geo Widengren の生涯・業績に関する記念論文集には、研究代表者が国際共著論文を寄稿した。他に、イタリアの, Maria Vittoria Cerutti、Giuliano Chiapparini による Ugo Bianchi (IAHR 会長 1990-95) 生誕 100 周年を記念した論集、Bruce Lincoln による Eliade と I. Culianu の関係についての新説がある。後者については、ルーマニア出身の Eliade 研究者、Liviu Bordas 氏を招き研究会を行った。ルーマニアではまた、Eugen Ciurtin が戦前の Eliade の著作の校訂版を編纂しており、昨今の国際情勢との関係も含めて動向を本共同研究でも注視している。

引用文献

Donald Wiebe, *An Argument in Defence of a Strictly Scientific Study of Religion. The Controversy at Delphi. A Critical Account of the Meeting of the Extended Executive Committee of the International Association for the History of Religions. September 13–15, 2019 Delphi, Greece*. Institute for the Advanced Study of Religion. Toronto, 2021.

Leonardo Ambasciano, *An Unnatural History of Religions: Academia, Post-Truth and the Quest for Scientific Knowledge*. Bloomsbury, 2019.

David G. Robertson, *Gnosticism and the History of Religions*. Bloomsbury, 2021.

Göran Larsson, *The Legacy, Life and Work of Geo Widengren and the Study of the History of Religions after World War II*. Brill, 2022.

Maria Vittoria Cerutti & Giuliano Chiapparini, *Religione e Storia. Omaggio a Ugo Bianchi nel centenario della nascita*. Rubbettino Editore, SOVERIA MANNELLI (CZ), 2023.

Bruce Lincoln, *Secrets, Lies, and Consequences: A Great Scholar's Hidden Past and His Protégé's Unsolved Murder*. Oxford U. P. 2023.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 江川純一	４．巻 24
２．論文標題 近現代イタリアの政教関係―ペッタッツォーニのイタリア共和国憲法批判を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 研究所年報	６．最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 奥山史亮	４．巻 21
２．論文標題 エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと分析心理学の展開	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宗教と倫理	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tim Jensen and Satoko Fujiwara	４．巻 ch 3
２．論文標題 Professor Geo Widengren, IAHR Vice-President 1950-1960, IAHR President 1960-1970, IAHR Honorary Life Member 1996	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Legacy, Life and Work of Geo Widengren and the Study of the History of Religions after World War II, ed. by Goran Larsson	６．最初と最後の頁 50-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/9789004499386_004	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Satoko Fujiwara and Tim Jensen	４．巻 32/2
２．論文標題 What's in a (Change of) Name? Much, but Not That Much and Not What Wiebe Claims	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Method & Theory in the Study of Religion	６．最初と最後の頁 159-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/15700682-12341478	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 宮嶋俊一	4．巻 55
2．論文標題 宗教概念批判以降の宗教現象学の可能性について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 基督教学	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 48
2．論文標題 戦間期ルーマニアにおける宗教現象学の形成	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北海道科学大学研究紀要	6．最初と最後の頁 147-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藁科智恵	4．巻 41
2．論文標題 世紀転換期ドイツ・プロテスタント神学における「神秘主義」－R.オットー理解の観点から－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国際関係研究	6．最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮嶋 俊一	4．巻 168
2．論文標題 ハイラー宗教学再考	5．発行年 2022年
3．雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	6．最初と最後の頁 37～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.168.137	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Shunichi Miyajima	4．巻 18
2．論文標題 From “Religious” Studies to “Spirituality” Studies : The Common Issues Included in Both	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences	6．最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/jfhhs.18.21	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 26
2．論文標題 エラノス会議における心理、民族、宗教の展開 ： ユングの民族論と分析心理学	5．発行年 2022年
3．雑誌名 精神医学史研究	6．最初と最後の頁 24－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 23
2．論文標題 大戦期エリアーデにおける国家統合と国民の追悼の問題	5．発行年 2023年
3．雑誌名 宗教と倫理	6．最初と最後の頁 59-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藁科智恵	4．巻 43
2．論文標題 オットー・グロースにおける認識と実践	5．発行年 2023年
3．雑誌名 国際関係研究	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 江川 純一	４．巻 97
２．論文標題 ファシスト政権下のイタリア宗教史学	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 3～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20716/rsjars.97.2_3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮嶋 俊一	４．巻 172
２．論文標題 ドイツ高教会運動とハイラー宗教学の形成	５．発行年 2024年
３．雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	６．最初と最後の頁 93～105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.172.193	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shunichi Miyajima	４．巻 19
２．論文標題 The Scientific Nature of the Study of Religion in the West and Asia	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences	６．最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤原聖子	４．巻 97
２．論文標題 国際宗教学宗教史学会（ＩＡＨＲ）報告― 二〇二三年国際委員会東京開催に向けて	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 174-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤原聖子	4．巻 40
2．論文標題 宗教「学」をめぐる論争の変遷と現在　―国際学会のアイデンティティ・ポリティックス	5．発行年 2023年
3．雑誌名 東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　4件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 藁科智恵
2．発表標題 オットー・グロースと心理学（パネル「エラノスという交差点―「宗教学」の形成史的再検討―
3．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 宮嶋俊一
2．発表標題 ワイマール共和制期ドイツの宗教学と宗教運動
3．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 奥山史亮
2．発表標題 エラノス会議における心理、民族、宗教の展開―ユングの民族論と分析心理学
3．学会等名 日本精神医学史学会第24回大会シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 ユングにおける群衆心理と人種心理学－初期エラノスとの関連－
３．学会等名 宗教倫理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エラノスにおけるヨーガ研究と宗教刷新運動
３．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Satoko Fujiwara
２．発表標題 Global Phenomenologies of Religion and their Implications for Philosophical Anthropology
３．学会等名 The Phenomenology of Religion as Philosophical Anthropology（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤原聖子
２．発表標題 「世界哲学」は世界に開かれているか―宗教学も直面する問い―
３．学会等名 連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」第6回「世界哲学と宗教」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと宗教学の展開
３．学会等名 宗教倫理学会第21回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 藁科智恵
２．発表標題 エラノス会議の場としてのアスコーナ
３．学会等名 エラノス研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 江川純一
２．発表標題 宗教研究の言説空間をめぐって――ヴィーコからペッタッツォーニへ
３．学会等名 日本倫理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮嶋俊一
２．発表標題 ハイラーにおける IAHR と東西交流
３．学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shunichi Miyajima
２．発表標題 From "Religious" Studies to "Spirituality" Studies: On the Common Issues Included in Both
３．学会等名 4th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion
４．発表年 2022年

１．発表者名 江川純一
２．発表標題 IAHRローマ大会におけるペッタッツォーニとヴァティカン
３．学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 藁科智恵
２．発表標題 R.オットーにおける「宗教史」理解
３．学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 大戦期エリアーデのナショナリズムと戦後の宗教現象学
３．学会等名 北海道基督教学会第61回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エリアーデにおけるIAHR創設とナショナリズムの問題
３．学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 大戦期エリアーデにおける国家統合と国民の追悼の問題
３．学会等名 宗教倫理学会第23回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エラノス会議と宗教学―ユングとエリアーデの関係を中心に―
３．学会等名 日本精神医学史学会第25回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 藤原聖子
２．発表標題 宗教史の中のIAHRと宗教現象学
３．学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Satoko Fujiwara
２．発表標題 Getting out of a proxy war: History and locality of the Japanese religious studies academy and Buddhist studies
３．学会等名 Interpreting Japan Interpreting Buddhism Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 江川純一
２．発表標題 ペッタッツォーニの最高存在論――その意義と可能性
３．学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エリアーデのシンボル論と宗教現象学をめぐる問題
３．学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 藁科智恵
２．発表標題 ルドルフ・オットーにおける「感情」ーCESRの議論と関連させて
３．学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Shunichi Miyajima
２．発表標題 Comparative Religion and Comparative Civilization
３．学会等名 比較文明学会第41回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 宮嶋俊一
２．発表標題 ワイマール共和制期ドイツの宗教運動と宗教学の形成
３．学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Shunichi Miyajima
２．発表標題 The Scientific Nature of the Study of Religion in the West and Asia
３．学会等名 The 5th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 藤原聖子
２．発表標題 還元主義VS反還元主義論争からこぼれ落ちていたもの
３．学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計5件

1．著者名 藁科智恵	4．発行年 2022年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 320
3．書名 ルドルフ・オットー『聖なるもの』と世紀転換期ドイツ ―信仰と近代学問の相克―	

1．著者名 Satoko Fujiwara, David Thurfjell, Steven Engler	4．発行年 2021年
2．出版社 Equinox	5．総ページ数 308
3．書名 Global Phenomenologies of Religion: An Oral History in Interviews	

1．著者名 江川純一・山崎亮監修	4．発行年 2023年
2．出版社 マナ・タブー・供犠―英国初期人類学宗教論集	5．総ページ数 488
3．書名 国書刊行会	

1．著者名 伊達聖伸，渡辺優，田中浩喜，江川純一，加藤久子，渡部奈々，西脇靖洋，小川浩之，渡邊千秋	4．発行年 2024年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 336
3．書名 カトリック的伝統の再構成	

１．著者名 E・シャープ著、久保田浩・シュルーター智子・江川純一監修	４．発行年 2023年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 596
３．書名 比較宗教学　ひとつの歴史／物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Annemarie Schimmel
https://www.uni-marburg.de/de/relsamm/sammlung/sonderausstellungen/annamarie-schimmel/annemarie-schimmel-wissenschaftlerin-sprachgenie-dichterin-und-freundesammlerin

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	奥山　史亮 (Okuyama Fumiaki) (10632218)	北海道科学大学・全学共通教育部・准教授 (30108)	
研究分担者	志田　雅宏 (Shida Masahiro) (10836266)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・講師 (12601)	
研究分担者	江川　純一 (Egawa Junichi) (40636693)	明治学院大学・国際学部・研究員 (32683)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藁科　智恵 (Warashina Chie) (60868016)	日本大学・国際関係学部・助教 (32665)	
研究分担者	木村　敏明 (Toshiaki Kimura) (80322923)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	宮嶋　俊一 (Shunichi Miyajima) (80645896)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	久保田　浩 (Kubota Hiroshi) (60434205)	明治学院大学・国際学部・研究員 (32683)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
IAHR Special Conference “Can the IAHR be engaged and relevant without being political or confessional? The position of ‘science (Wissenschaft)’ in 2023”	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	マールブルク大学	マールブルク宗教博物館		